

2025年3月1日発行

いのち・未来 うべ通信 32号

わたしたちは原発のない安全な未来を
子どもたちに残すことを願って活動しています

〒755-0029 山口県宇部市新天町1丁目2-36

宇部市民活動センター「青空」内 TEL 080-6331-0960 (安藤)

ブログ : <https://blog.goo.ne.jp/nonukes2013>

県知事は、使用済み核燃料の中間貯蔵施設の建設に反対を

安藤公門(いのち・未来 うべ事務局長)

村岡嗣政・山口県知事は、上関町の使用済み核燃料の中間貯蔵施設について、賛成か、反対かを明らかにしていない。

県知事として中間貯蔵施設の建設に反対の意思表示を行うべきだ。

この施設は山口県にどんな利益ももたらさない。逆に、孫子の世代に渡って禍根のみを残すからだ。仮に、2000 トンクラスの使用済み核燃料が運び込まれるとして、その「死の灰」は、広島原爆の6万倍～8万倍に相当する。「中間」とは名ばかりで、日本の核燃料サイクル政策の破綻によって、永久施設になる可能性が高い。「核のゴミ捨て場」としての山口県が定着し、次々と核施設が誘致・強制される。

県知事が現在、進めようとしている政策課題との関係でみると、第1に、人口減対策、若者の流失を防ぎ、Uターン、Iターンを増やす課題にプラスになるだろうか。上関町の周辺自治体の首長は、「豊かな自然を活かした、若者定住政策が軌道に乗り始めたのに台無しにされる」と異口同音に語っている。第2に、伝統的な瀬戸内海コンビナートの産業構造は様々に変革が求められているが、近接に核のゴミ施設があって、大きな投資が望めるだろうか。事故が起これば工業用水のダム湖に放射能汚染が降り

注ぐのだ。第3に、山口県の産業の基幹をなす農林水産業へのダメージだ。一旦事故にさらされれば、回復不可能な打撃を受けることを東電福島事故は証明している。後継者の育成を語っても虚しく響くばかりだ。

今、村岡県知事は、台湾やアジア諸国に、瀬戸内観光を売り出しているが、その真ん中に「死の灰」の施設ができることは、どう説明するのだろうか。

県知事は、田布施町議会の選挙の結果、柳井市の連合自治会の要望などの周辺自治体の住民の意思を尊重し、中間貯蔵施設の建設に反対の態度表明を行うべきである。きっぱりと県民の側に立った政治的決断を行うことを強く求める。

～ 目次 ～

県知事は、使用済み核燃料の 中間貯蔵施設の建設に反対を・・・	1
田布施町で示された民意を広げ、 山口県を変えよう	・・・ 2
炭素を「死の灰」と比べるなんて！	・・・ 4
六ヶ所核燃再処理工場の放射能汚染リスク	・・・ 7
編集後記	・・・ 8

田布施町で示された民意を広げ、山口県を変えよう

岡本正彰(いのち・未来 うべ代表)

田布施町議選の結果は、上関の中間貯蔵施設計画反対の候補が見事に全員当選しました。落合祥二さん 小中進さん 高見英夫さん 西本篤史さん 藤田枝里香さん 守田達也さんおめでとうございます。選挙スタッフ、支援者の皆さんもお疲れさまでした。新人の藤田枝里香さんがトップで、元町議・元県議・原発いらん!山口ネットワーク代表の小中進さんは3位で当選されました。また上位8名は、2人を除いて6人が中間貯蔵施設計画に反対を表明しています。民意は、はっきり示されました。

6人全員の勝利をもたらした要因は、なんと言っても第一に中間貯蔵施設計画に対する危険性であると考えます。核燃料サイクルが破綻していると言える現状では、いくら電力会社と上関町長が口先だけで「最終処分場にはならない、させない」と言っても、最終処分場になる懸念は大きく、長年にわたり自民党議員の支援者だった連合婦人会のみなさんも中間貯蔵施設計画に怒りの声を上げられています。また田布施町は周防大島町と同じく、近年においても移住者が増えつつあります。移住理由は住みやすさと安全、それが中間貯蔵施設計画によって、破壊されることへの危惧と怒りも、投票行動に結びついたと思います。

もう1つの大きな要因は、我々の運動の精神的支柱でもある、小中進さんの出馬と、彼のこれまでの運動による蓄積です。田布施町議を経て、山口県議も1期務められました。昨年には柳居県議会議長のお膝元大島郡区より、原発推進の自公県政に対抗するため出馬され、周防大島町民の意識に変革をもたらしました。上関原発を建てさせない思いの辻立ちは、上関町へ向かう平生町の交差点で2008年に開始され、今も精力的に続けられています。そうした持続性と、分け隔てなく誰をも大切に作る姿勢、上関原発を建てさせない、中間貯蔵施設も建てさせな

い思いが、田布施町を問わず県内、県外の方から広く支援され、見事に当選されました。彼が当選したことはとても喜ばしく、中間貯蔵施設計画反対の議員をまとめるリーダーとして、活躍されることが期待できます。

中間貯蔵施設反対が決議されれば、上関町長だけでなく、村岡県知事を動かすことにもなります。村岡知事は2023年8月9日の定例記者会見で、上関町の中間貯蔵施設計画について、以下のように言っています。

「上関町だけではなくて周辺の市町もあるわけがありますので、安全がいかんにして確保されるのかというところが、最も重要な関心事項でありますので、仮にステップが進んだ段階では、県として判断する、その中で、その観点で、よく我々なりに把握もし、検討もしていくということになってくると思います」。

これは、田布施町等周辺自治体の意向を尊重し、県知事として態度を示すと表現していると考えます。県知事がノーと言えば計画は先へ進みません。記者会見として記録されているので反故にすることもできませんし、今までのようにあいまいな態度をとれば、来年の県知事選挙にも影響するでしょう。自民党・公明党の県議たちも中間貯蔵施設計画について、今までのように反対請願を否決し続ければ、次回選挙にも影響することの自覚を迫られざるを得ません。

さらには全県的な問題として、自治体を動かすことにつながります。上関原発を建てさせない美祢・山陽小野田・宇部地域実行委員会は、今月10日に宇部市長へ「上関町の『使用済み核燃料中間貯蔵施設』建設計画において宇部市としての対応に関する要望書」を提出しましたが、宇部市長も田布施町議選の結果をふまえて、解答しなければなりません。

「宇部は上関から離れている」という回答ははじめから言い訳にさえなりません。田布施町議選の結果でさらにその手の解答はできなくなり、宇部市民の安全を守る市長としての責任が問われます。そうしたことが、さらに県知事を動かすことになり、県内自治体にも波及することになります。

今まで中間貯蔵施設計画について知らなかったり、関心を持とうとしなかった県民にも影響を与えます。多くの県民が中間貯蔵施設反対の声をあげれば、それがまた首長や議員を動かすことになり、中間貯蔵施設計画白紙撤回、ひいては上関原発計画白紙撤回につながるものと確信します。

田布施町が変われば山口県が変わる、中間貯蔵施設反対の声をさらに粘り強く大きくしていきましょう。



『はんげんぱつ新聞』編集長 末田一秀さんの
応援演説を受ける小中進候補

2025年1月28日

上関原発を建てさせない 山口大集会 2025

日時:2025年3月22日(土)

10:00~14:00

場所:山口市維新百年記念公園
野外音楽堂

入場無料/雨天決行

- ・メインスピーチ:青木美希さん
(ジャーナリスト・作家)
- ・福島からのゲスト:千葉親子(ちかこ)さん

宇部で前夜集会

千葉親子さんを囲む会

「子ども甲状腺ガンと
安定ヨウ素剤の配布」

と き:3月21日(金)18:30~20:00
ところ:宇部市多世代ふれあいセンター
3階第1講座室

千葉親子さんは会津坂下町(ばんげ)町で町議会議員をされ、現在は「甲状腺がん支援グループ あじさいの会」で共同代表をされています。そのなかで、会の共同代表のおひとり牛山元美医師と安定ヨウ素剤の配布活動をされています。

稼働する原発がある以上、宇部も原発事故に備え、安定ヨウ素剤を備蓄する必要があると考えます。行政に提言するため、まずは市民の側から安定ヨウ素剤について知りましょう。

山口市では

青木美希さんを囲む会

と き:3月21日(金)18:30~19:30
ところ:山口市湯田サンフレッシュ山口

炭素を「死の灰」と比べるなんて！

大原洋子

2/19 毎日新聞一面記事に

『脱炭素電源「最大限活用」エネ基閣議決定 原発
回帰鮮明』

本文には「再生可能エネルギーと原発など脱炭素電
源は『最大限活用する』と明記」とあった。

それほどまでに「脱炭素」は重要なのか？

原発は脱炭素電源と言えるのか？

地球温暖化いつから問題に？

『考えよう地球環境 大気の本』2004年には「地球がこれほど生き物がくらすのにふさわしい温暖な気温にたもたれているのは、大気中の二酸化炭素などのおかげです。二酸化炭素などの気体は、地球からにげていく熱を吸収して、まるで温室のように地球の気温をたもってくれているのです。このはたらきを温室効果といいます。」とある。なのに、いつから、なぜ二酸化炭素がこんなに悪者になったのだろう。

「地球温暖化」は1970年代に科学者に注目されるようになり、1988年、「気候変動に関する政府間パネル(IPCC)」設立。

決定的だったのは、2006年、アル・ゴアが地球温暖化を訴える講演の映画『不都合な真実』公開。それ以来、炭素悪玉説が席卷しているようだ。加えて2018年以降、グレタさんのCOP24での演説等の活動が世界的に派手に報じられたことも大きい。

以下は、この問題についての小出裕章さんの講演の抜粋です。かなり簡略化していますので、図表も含め、最後の参考資料をごらんください。



【2018.2.28 第6回小出裕章公開講座@松本】

I. IPCCによる評価と歪められた主張

地球は温暖化しているのか

地球温暖化が問題になり、一番中心になって解析し、情報を発信してきた組織はIPCC。この1850年～2012年のデータには1880年～2012年に平均気温が0.85℃上昇したとあり、確かにこの頃から地球が温暖化している。

次に、大気中の二酸化炭素濃度の1958年～2012年の約50年分。(温暖化のほうは160年分なのに) いずれにせよ、データでは地球が温暖化しており、大気中の二酸化炭素がふえている。

地球温暖化と二酸化炭素との因果関係

だが、この2つの間に因果関係があるのか。あるとすれば、どちらが原因でどちらが結果なのか。別にきちんと検証しなければいけない。

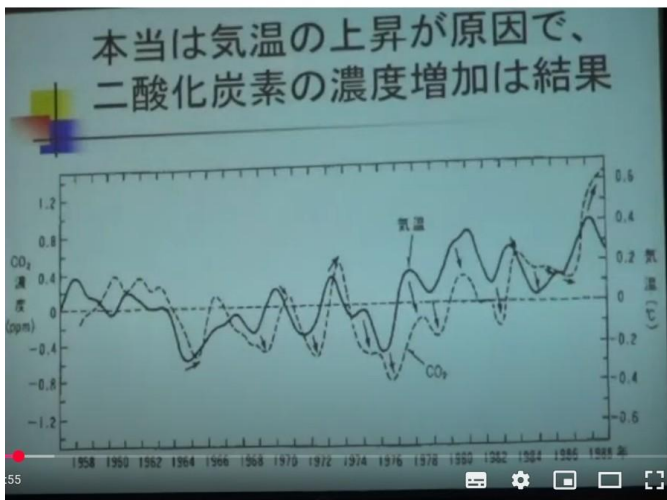
温暖化は19世紀初めから

900年～2000年のグラフでは、寒冷化していき、1800年代初めから温暖化の傾向に見える。地球の二酸化炭素の濃度が劇的にふえ始めたのは1946年＝第二次世界大戦が終わり資本主義社会が世界を席卷するようになり、膨大なエネルギーを使い出しから。ICPPはこの50年間だけ。その前から示すべきだが、そうしなかった。むしろ隠したかった。

つまり、二酸化炭素の急激な増加は世界大戦が終わって爆発的な工業化以降。でも、地球の温暖化自身は 19 世紀の初めから。二酸化炭素の放出と全く関係なく地球は温暖化していた。IPCC が正しくて、地球の温暖化は二酸化炭素のためだと思ってきた皆さん、そうではないことに気づいてほしい。

温暖化には自然要因もあるし、人為要因もある

因果関係はある。しかし、二酸化炭素が原因で地球が温暖化しているのではなく、逆に、地球が温暖化したからこそ結果として大気中の二酸化炭素がふえている。



裕章公開講座（後半）

このグラフによると、気温(実線)が上昇すると、それにおくれて二酸化炭素(点線)がふえ、下がると、それにつれて二酸化炭素が減る。なぜか。地球が温まる＝海が温まる⇒海に溶けていた二酸化炭素が出るから。

45 万年前からのデータによると、地球は温暖化⇒氷河期を 4 回経験。今は温暖化。この気温の変化は 10°Cにも及ぶ。人間の活動と全く関係なく。二酸化炭素が温暖化を生んでいるのではなくて、温暖化することによって大気中の二酸化炭素濃度がふえるのが地球の歴史。そうであれば、人類が二酸化炭素を出すというより、むしろ地球は温暖化・寒冷化を繰り返す星だということを受け入れるしかない。その中でどう生き延びるか考えることが大切。

もっと長いスパンで言うと、地球はもっと温かい星だった。ほとんどの地球の歴史は現在の地球よりも温かかった。その星の中で生き物が永らえてきた。温かいことが悪いなんて、さらさらない。

仮に地球が温暖化して困るとしても、地球という星や生き物全体が困るわけでもない。たまたま工業化があつて贅沢を繰り返した人類があるところで何か困ることがあるかもしれない、せいぜいその程度。地球はこういう星だと、まずは了解しないといけない。

II. 原発は最悪

歪められた主張

原子力推進派の主張はこうだ。「原因が二酸化炭素、そして温暖化は結果だ。二酸化炭素がふえたために温暖化している⇒原子力は二酸化炭素を出さない⇒原子力を進めていけば温暖化は防げる、だから原子力をどんどん使おう」

二酸化炭素と「死の灰を」比べる愚

化石燃料を燃やせば二酸化炭素が出るのは当たり前。原子力の燃料ウランを燃やしても二酸化炭素は出ない。では、ウランを核分裂させれば何が出るのか。核分裂生成物(死の灰)だ。

二酸化炭素は大変重要でありがたいもの。二酸化炭素がなければ植物は生きられない。(補足:光合成の原料)当然、人間を含め動物も生きられない。一方、放射性物質は微量でも生命体に危険を伴う。絶対有害。生命にとって必要な物質である二酸化炭素を生むことが悪くて、生命にとって必ず危険を伴う死の灰がクリーンだという主張は、初めから間違っている。

原子力は二酸化炭素を出さない???

もう一つ国の宣伝:昔「原子力は二酸化炭素を出さない」⇒今「原子力は発電時に二酸化炭素を出さない」この宣伝自体が全くの偽り。

原子力は鉱山でウランを採掘・製錬する時にも、濃縮・加工する時にも二酸化炭素を放出する。原発

を建設する時にも膨大な二酸化炭素を放出するし、運転時にも放出する。その上、10 万年、100 万年の管理を求める核のごみの始末を考えれば、原子力だけはやってはいけない。

エネルギー消費の格差と不公平

いわゆる「先進国」と自分たちを呼んでいる国、この第1グループで世界全体のエネルギー消費量の65%を使っている。第2グループで20%。第3が10%。最後のグループは5%しか使えない。人口は4分の1でもエネルギーは5%。国連の定義で「絶対的貧困」と呼ばれる状態にある。11 億人（補足：当時の人口の15%）がまともに生きられない状態にある。

必要なのは「低炭素社会」ではなく

「低エネルギー社会」

「化石燃料をやめる。原子力が必要なんだ」「再エネでやればいいんだ」と言っているが、違う。気候変動の原因は、単に二酸化炭素の増加にあるのではない。産業革命以降、特に第二次世界大戦以降の急激なエネルギー消費の拡大の過程で二酸化炭素が大量に放出されたことは事実だし、それが気候変動の一番の原因になっていることも本当だろう。

しかし、生命環境破壊の真因は、「先進国」と呼ばれる一部の人類が産業革命以降、エネルギーの膨大な消費を始めた、そのこと自体にある。そのため、多数の生物種がすでに絶滅させられたし、今も絶滅されようとしている。地球の環境が大切であるというのであれば、二酸化炭素の放出を減らすなどという生やさしいことでは済まない。

人間の諸活動が引き起こした災害には、大気汚染、海洋汚染、森林破壊、酸性雨、砂漠化、産業廃棄物、生活廃棄物、環境ホルモン、放射能汚染、さらには貧困、戦争など多数ある。そのどれをとっても巨大な脅威。温暖化が仮に脅威だとしても、無数にある脅威の一つに過ぎないし、その原因の一つに二酸化炭素があるかもしれないというに過ぎない。それだけのことなのに、今、多くの人は二酸化炭素だけに

目を奪われている。

真に求められるのは、何よりもエネルギー浪費社会を改めること。あらゆる意味で原子力は最悪の選択だし、代替エネルギーを探すなどという生ぬるいことを考える前に、まずはエネルギー消費の抑制こそに目を向けねばならない。世界は、化石燃料をやめて再エネに、それがビジネスとして儲かると言っ

て、そちらに向かっている。悪いことではないが、もっと本質的なことを考えていかないと解決ができない。

地球温暖化に関しては正確な情報を与えられていないし、騙され続けている。大量の情報が常に正しいことはない。むしろ疑いながら見たほうがよい。皆さん自身がどの情報が正しいか、これからしっかり考え、未来をつくっていくために力をかしていただければありがたい。

【筆者感想】

ボロディン作曲“韃靼(だったん)人の踊り”ならぬ“脱炭素人の踊り”と呼びたいほど、近年脱炭素が声高に叫ばれ、忸怩たる思いの私に、一貫して変わらぬ小出さんの主張は実に真っ当に響きました。

特に現在はずっと「大量の情報をむしろ疑いながら見たほうがよい」状況で、踊らされてはならないゾ！と強く思いました。

【参考】いずれも小出裕章さん

◆2022.11.20

「講演」小出裕章:3.11 福島原発事故から11年、脱炭素・原発再稼働・小型原発を問う

◆2007.1.14 「地球温暖化問題の本質」

◆2009.10.26 (第108回原子力安全問題ゼミ)
「地球温暖化と二酸化炭素」

六ヶ所核燃再処理工場の放射能汚染リスク

村上ひとみ

はじめに

核燃料再処理工場は青森県六ヶ所村で 1993 年に建設が始まり、日本原燃（株）により 2026 年に完成目標とされている。この間、延期は 27 回に及ぶ。

原発の使用済み燃料からウランやプルトニウムを取り出す核燃料再処理はどんな工程なのだろう？再処理工場の危険について、小出・他（文献 1）が徹底批判している。原子力資料情報室の解説（文献 2）もわかりやすい。

再処理工場の工程と高レベル放射性廃液

六ヶ所の工場で 2006 年～2008 年に実施したアクティブ試験では、核燃料棒を切り刻み、金属を除き、高熱の硝酸で溶かして、ウラン、プルトニウム、核燃焼生成物（死の灰）を分ける工程によって、425 トンの核燃料を処理して 346 m³ の高レベル放射性廃液が出た。しかしガラス固化体を作る工程で事故がありガラス固化が遅れ、現在も 211m³ の非常に危険な廃液が液体として保管されている（文献 3）。

茨城県東海村で先行していた核燃料再処理工場は廃止されたが、六ヶ所よりもはるかに多い 370m³ もの高レベル放射性廃液を抱え、ガラス固化できずに、ひたすら電気と水で冷やし続けているという。東海村にそれほど危険な施設があるとは知らなかったが、2011 年の東日本大震災で大事故のリスクも高かったのではと、驚く。

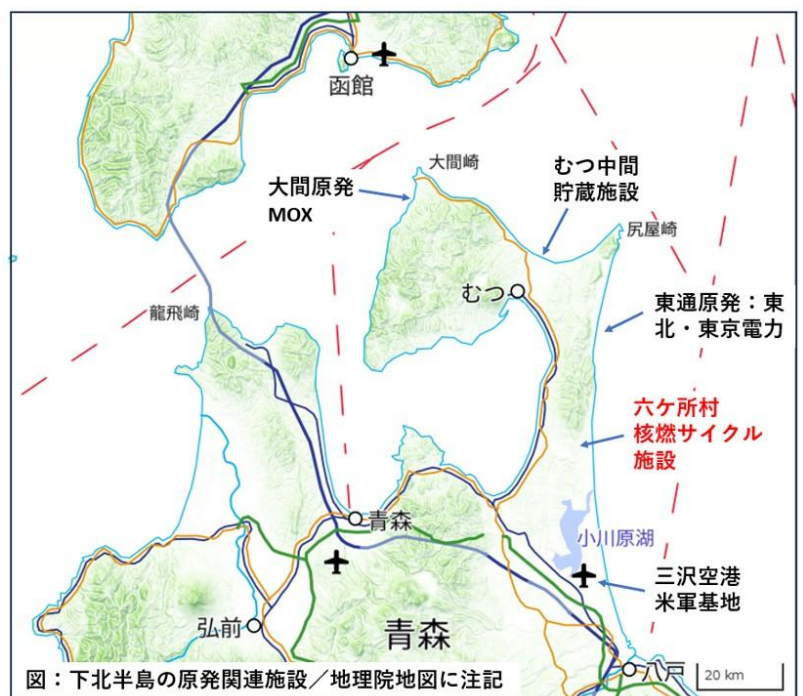
地震・複合災害のリスク

六ヶ所村は青森県下北半島の太平洋側に位置している。この地域は、東の太平洋プレートが西の北米プレートの下に沈み込む活発な地震帯に立地している。1968 年十勝沖地震（M7.9）、2003 年十勝沖地震（M7.1）など M8 クラスの大地震が繰り返

し起こる地域で、2011 年東北地方太平洋沖地震（M9.0）の震源域のすぐ北隣りに位置しており、近い将来、確実に M8 以上の大地震が起こると想定される。

また、2024 年能登半島地震（M7.6）で 100km に及ぶ地震断層の陸側で 3m も隆起したという地殻変動の厳しさは記憶に新しい。六ヶ所村施設付近には活断層がいくつも確認されている（文献 1）。

核燃料再処理工場（六ヶ所で抱える使用済み核燃料 2968 トン U は大飯原発の 1840 トン U より多い）や高レベル放射性廃棄物保管庫（フランス他から返還されたガラス固化体 1830 本他）なども、地震により過酷事故の危険があると推測される。



下北半島の核施設集中

青森県下北半島の核関連施設の地図を図に示す。六ヶ所村の施設の他、むつ市の使用済み核燃料中間貯蔵施設、東通村の原発（東北電力 10 基、東京電力 10 基の建設計画のうち、東北電力 1 基が完成し

て 2011 年震災当時稼働中だったが、以後停止中)、大間原発(プルトニウムを使うプルサーマル原発 1 基を建設中、電源開発(株))など、核施設の集中が甚だしい。六ヶ所村から 20km 圏に三沢空港・米空軍基地も立地し、戦闘機の事故も心配である。函館市は津軽海峡を挟んで大間原発の 25km 圏に立地し、2013 年から市として大間原発の違法性を訴え、差し止め訴訟を起こしている。

下北半島の現地レポート動画公開

ノンフィクション作家・山岡淳一郎氏が下北半島の核ゴミ・原発施設取材した動画が公開されている(文献 4)。再処理工場について、核燃サイクル阻止 1 万人訴訟原告団の山田清彦氏の現場説明がわかりやすい。大間原発では、1990 年代から土地を電力会社に売らずに抵抗を続ける「あさこはうす」2 代目熊谷厚子さんの語りに心動かされる。是非多くの方に視聴・シェアして頂きたい。

現場技術者の解説と高木仁三郎全集

再処理工場の具体的な工程、事故のリスクについて、六ヶ所や東海再処理工場の現場に詳しい技術者 OB の解説(文献 5)が参考になる。

高木仁三郎著作集に、「核燃料サイクル批判」(文献 6)があると気づいたのは昨年のこと。山口大学工学部の開架に全集が並んでいたのに、在職中は全く気付いていなかった。核燃サイクルの中止を求める裁判への証言として高木氏が 1991 年、がんで闘病しながら、命を削って執筆されたと知る。

六ヶ所再処理工場は稼働させず廃止するのが、地震・複合災害による過酷事故と被ばくの人的被害、膨大な農地・山林・海洋の放射能汚染を防ぎ、テロの危険あるプルトニウムを増やさないために極めて大切と思う。

参考文献

- 1) 『「最悪」の核施設 六ヶ所再処理工場』小出裕章・渡辺満久・明石昇二郎、集英社新書、2012。
- 2) 『とめよう！六ヶ所再処理工場』原子力資料情報室 <https://cnic.jp/knowledgeidx/rokkasho>
- 3) 『再処理工場の核惨事 すべてのいのちを守るために』脱原発政策実現全国ネットワーク・再処理問題プロジェクトチーム・浅石紘爾・他、制作・発行、2024。
- 4) 『ルポ原発めぐり 第 4 回/核燃サイクルは幻想！再処理の超危険な核ごみ、無人の原発タウン〈青森県一六ヶ所・むつ・大間・東通〉』山岡淳一郎、撮影：2024 年 11 月デモクラシータイムス
<https://www.youtube.com/watch?v=-A7W71DuTA8>
- 5) 『原発より危険な六ヶ所再処理工場』館野淳・飯村勲・立石雅昭・円道正三、本の泉社、2017。
- 6) 『核燃料サイクル施設批判、高木仁三郎著作集第 5 巻』高木仁三郎、七つ森書館、2003。



～ 編集後記 ～

「使用済み核燃料の中間貯蔵施設は、NO!」田布施町民の意思を実現するのは、県知事の反対表明です。★岡本さんは、勝利の要因を①原発と核施設の危険性②政治は誰のためにあるのか③小中進さんの粘り強い活動に求め、全県への広がりを訴えています。★大原さんが紹介している小出裕章さんの松本講義は、原発回帰・推進にも持ち出される「地球温暖化の原因は、CO2 である」という説への事実に基づく批判です。★上関町に中間貯蔵施設計画が持ち上がって以来、私たちの関心は青森県の下北半島等の核施設群に向けられてきました。とくに六ヶ所村の再処理工場にです。村上さんは、文献紹介で案内してくれています。論議に活用ください。(編集部 A)